

「コラボレーション方式VI」によるエンカウンター・グループの試み：段階的に非構成方式に近付けることによるファシリテーター養成について

野島，一彦
九州大学大学院人間環境学研究院

高田，加奈子
九州大学大学院人間環境学府

陳，香蓮
九州大学大学院人間環境学府

土田，裕貴
九州大学大学院人間環境学府

他

<https://doi.org/10.15017/25157>

出版情報：九州大学心理学研究．13，pp.179-189，2012-03-30．九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：



「コラボレーション方式Ⅵ」による エンカウンター・グループの試み —— 段階的に非構成方式に近付けることによる ファシリテーター養成について ——

野島 一彦 九州大学大学院人間環境学研究院

高田加奈子・陳 香蓮・土田裕貴・中野 愛・野口恵美 九州大学大学院人間環境学府

**A trial of an encounter group by the “Collaborative Method VI” :
Consideration of a facilitator training using the method of gradually being more unstructured group**

Kazuhiko Nojima (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

Kanako Takada, KaoruRen Chen, Yuki Tsuchida, Ai Nakano, and Emi Noguchi
(*Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This is a case study of an encounter group using the “Collaborative Method.” Five candidates individually facilitated an encounter group (14 sessions, 90 minutes every week on a university campus), and the “Collaborative Method VI” that was gradually adopted to approximate to the unstructured group was introduced to the group; sharing time made longer, the limit of time for an only member to talk was released, and the theme setting method changed the choosing. The candidates were also supervised by an experienced facilitator. In this study, group structure and group processes were described, and the following two points were discussed: (1) Facilitator training by the “Collaborative Method” through the experience of playing the role of a facilitator, and (2) The member’s experience of the encounter group. We conclude that “Collaborative Method” is a useful for facilitator training.

Key Words: “Collaborative Method VI”, encounter group, facilitator training

I はじめに

近年、グループ・アプローチは教育領域や医療領域といった様々な臨床の現場で実践がなされている。特に、エンカウンター・グループ（以下 EG）は構造化された構成的 EG（以下 SEG）と構造化されていない非構成 EG（以下 UEG）があり、対象や目的に合わせた実践が積み重ねられており、両者の特徴を融合させた半構成方式についても考案され、その報告がなされている（森園・野島, 2006; 星野・野島, 2008）。

そのような EG のファシリテーター（以下 Fac）養成の方法としては、これまで Fac Candidate（以下 FacCa）がグループ（以下 Gr）の席陪をすることやメンバー（以下 Me）体験をすることなどが主であった（野島, 1985）。しかし、野島・内田（2001）は FacCa がコ・ファシリテーターとしてベテラン Fac と同じ Gr を担当する「コ・ファシリテーター方式」を報告し、それ以降、改善がなされ（野島・吉岡ら, 2002; 野島・西ら, 2003; 内田・野島, 2003; 野島・金子ら, 2004, 野島・廣ら, 2005; 野島・伊勢谷ら, 2006; 桂木, 2007）、「コラボレーション方式」（野島・桂木ら, 2007）へと発展した。

「コラボレーション方式」は、ベテラン Fac のもと FacCa らが Gr 全体を動かす全体 Fac とスモール Gr（以下 SGr）に入る SGr-Fac の両役割をとるものである。これまでに前方式の課題を元に改良しており、SGr の Me を固定することで Gr の深まりと親密感の高まりが生まれた「コラボレーション方式Ⅱ」（野島・江ら, 2008）、SGr に分かれる前に傾聴訓練を導入した「コラボレーション方式Ⅲ」（野島・山崎ら, 2009）、より自発的な Me 間の交流につながる UEG の体験版として非構成的セッション（以下 Se）を導入した「コラボレーション方式Ⅳ」（野島・高橋ら, 2010）、安全感を有した中で Me の自発性が発揮されるテーマ選択法を導入した「コラボレーション方式Ⅴ」（野島・大庭ら, 2011）へ発展している。

そこで、今回筆者らは「コラボレーション方式Ⅵ」（以下、本方式）を実施した。本方式は、「コラボレーション方式Ⅴ」までの特徴を踏襲した、① “全体 Fac” をベテラン Fac が、“SGr-Fac” を FacCa が担当し、協同で Gr を進めていく、② テーマ設定法を導入する、③ SGr の Me を固定する、④ SGr の Me と SGr-Fac の意図的マッチングを行う、⑤ 傾聴訓練をテーマ Se の前に導入する、という方式である。これまでの「コラボレーション方式」

から「コラボレーション方式Ⅵ」までの6つの方式の対照表を Table1 に示す。

「コラボレーション方式Ⅴ」では Me の安全性の保障のために非構成的 Se を導入していない（野島・大庭ら, 2011）。しかし, 「構成的 Se から半構成的 Se へと移行し, さらに非構成的 Se を体験するという構造は Me が安心感, 安全感を持ちながら少しずつ Gr に慣れ, 自発性を発揮することに役立った」と野島・高橋ら（2010）は報告しており, 段階的に構造が変わる中で Me が安心感・安全感を持っていったことが示されている。また, Fac 養成という観点から非構成的 Se を導入することで, かなり異なるとされる SEG と UEG のファシリテーションの違いを体験できること, いきなり UEG の Fac をするよりも安心感を持って非構成的 Se を体験できることが報告されており, これらを鑑みると, 非構成的 Se を導入することの意義は大きいと考えられる。そのため, 本方式では非構成的 Se を取り入れることとした。その際に, 「コラボレーション方式Ⅳ」では, 非構成的 Se において UEG 経験のある FacCa と経験のない Me との間で沈黙への耐性の違いなどからファシリテーションについて FacCa の戸惑いが生じたとされているが, その点については実施方法の工夫による改善の可能性が言及されている（野島・高橋ら, 2010）。よって, 本方式では半構成的 Se から非構成的 Se へと急激に移行するのではなく, 段階的に非構成方式へ構造を変化させていくようにした。具体的には全員が発言した後のシェアリングの時間を徐々に長くした上で, 一人当たりの時間設定（以下, 時間設定）をなくすことや「コラボレーション方式Ⅴ」で導入されたテーマ選択法を取り入れることを段階的に行ない, 半構成的 Se から非構成的 Se へと変わることでの Me や FacCa が抱く戸惑いが小さくなるようにした。このため, 本方式において FacCa は多様な構造の Se でファシリテーションをすることが可能になり, そのことで FacCa は成長できるのではないだろうかと思われる。また, Me にとっては“今, ここで”自分が感じている

ことに目を向けたり, Me 同士の相互作用によりつながっている感じが持てたりする体験になることが期待された。そのため, 本方式は特に「今, ここで」自分が感じていることに目を向ける体験, 「Me 同士の相互作用が生まれやすく, つながっている感じが持てる」をねらいとして行なった。

以上より, 本稿では「コラボレーション方式Ⅵ」を用いた Gr の構成と経過を報告し, ①FacCa の体験から見た本方式における Fac 養成, ②Me にとっての Gr 体験について考察することを目的とする。

Ⅱ グループの構成

1. グループの位置づけ

学部生対象の自由選択授業「グループ・アプローチ論演習」（5 時限目, 90 分）の一環として行なわれた。

2. グループ編成

Me は学部 2～4 年生, 聴講生等。年齢は 19～53 歳, 平均 22.3 歳 ($SD=6.31$)。参加人数は平均 51.2 名 ($SD=4.6$)。Fac は授業担当教員（60 代, ベテラン Fac）。FacCa たちはいずれも大学院生（20 代男性 1 名, 20 代女性 4 名）。

3. セッションの構造と進め方

Se1～5 は Fac が担当する構成的 Se。Se6～13 は FacCa たちがそれぞれ SGr（1Gr 十数名）を担当。半構成的 Se に始まり, シェアリングの時間を長くしていったり, 半構成方式の特徴である一人当たりの時間設定を無くしたり, テーマを Me が選べるようにテーマ選択法を導入したりと段階的に非構成方式に近づく構造をとった（Table 2）。また, Se3 以降は全 Se のはじめに前 Se の Se アンケートについてベテラン Fac よりコメントが返された。そして, ウォーミングアップ（以下 WU）として他者と触れ合ったり体を動かしたりするようなエクサ

Table 1
コラボレーション方式の特徴の比較

	コラボレーション方式	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ
メンバー	Se 毎にシャッフル	固定				
全体 Fac	FacCa	ベテラン Fac				
検討会	スタッフミーティング	グループスーパービジョン（GrSV）				
時間の構造	一人当たりの時間が設定されている			1Se のみフリー	一人当たりの時間が設定されている	Se6～9：時間設定有 Se10～13：時間設定無
Se 構造の相違	構成的 Se+半構成的 Se			構成的 Se+半構成的 Se+非構成的 Se	構成的 Se+半構成的 Se	構成的 Se+半構成的 Se+非構成的 Se
テーマの設定方法	テーマ設定法				テーマ設定法+テーマ選択法	

サイズ（以下 Ex）を FacCa が持ち回りで担当・実施し、Se の終わりには Fac、FacCa より Se の感想を全体に伝えた。その後、Me は Se アンケートの記入を行った。

4. グループ・スーパービジョン

毎 Se について Gr スーパービジョン（以下 GrSV）が行われた。GrSV では、FacCa が前回の授業で行なわれた担当 SGr の流れと Se アンケートを報告し、ベテラン Fac と Fac 養成を受けた、あるいは養成を受けている臨床心理学専攻の大学院生 10 名弱と FacCa により Se を振り返るためのディスカッションを行った。振り返りのディスカッションの後、次 Se プログラムの打ち合わせを行った。GrSV の時間は毎回 90 分であった。

5. 場 所

広いプレイルーム（80 人くらい収容できる部屋）を使用した。

6. リサーチ

Me に Gr 開始前と終了後に参加意欲や期待度、満足度等を記入する「参加者カード」、各 Se 後に「Se アンケート」（魅力度を含む）[いずれも 7 段階評定：1～7]の提出を求めた。

Ⅲ 経 過

1. 参加前の気持ち

Me の Gr 開始前の参加意欲度、期待度の平均値は、5.54 ($SD=0.99$) / 5.3 ($SD=1.06$) であった。自由記述は、「人の話を聞くのが好きなので楽しみ」「ワクワクしている」「傾聴の仕方について吸収したい」といった Gr への期待や楽しみが語られる一方、「知らない人が多いのか」といった他者との交流についての不安な気持ちなどがあった。

Table 2
セッションの構造と進め方

Se	Gr の 大きさ	WU	進め方	ベテラン Fac	FacCa	時間 設定	シェア リング	テーマ
Se1	全体		オリエンテーション（Gr アプローチについての講義）→FacCa から一言ずつあいさつ	講義	あいさつ			
Se2	全体		構成的 Se（マンウォッチング→マッサージ→背中合わせ→イメージフィードバック→私のキーワード付き自己紹介）	全体 Fac	Me として動く Me の観察			
Se3	全体	マッピング	傾聴訓練（以下 AL）説明→AL デモンストレーション＜5つの技法＞→AL デモンストレーション＜簡単な受容・繰り返し＞→AL 実習（3人1組）	・全体 Fac ・AL 聞き 手役のデ モンスト レーション	Me として動く Me の観察 AL 話し手役でデ モンストレー ション			
Se4	全体	木とリス	AL デモンストレーション＜簡単な受容・繰り返し＞→AL 実習→AL デモンストレーション＜+明確化＞→AL 実習→AL デモンストレーション＜+支持（サポート）＞→AL 実習					
Se5	全体	進化じゃんけん	AL デモンストレーション＜+質問＞→AL 実習→AL 総合練習→SGr の発表					
Se6	SGr 毎	仲間探し	テーマ確認・テーマについてのデモンストレーション→SGr に分かれ一人ずつ決められた時間内にテーマについて話す→シェアリング→SGr 名決め			あり	5 分	設定
Se7	SGr 毎	人文字	テーマ確認・テーマについてのデモンストレーション→SGr に分かれ一人ずつ決められた時間内にテーマについて話す→シェアリング				10 分	
Se8	SGr 毎	資本主義ゲーム	テーマ確認・テーマについてのデモンストレーション→SGr に分かれ一人ずつ決められた時間内にテーマについて話す→シェアリング				15 分	
Se9	SGr 毎	人間イタ取りゲーム	テーマ確認・テーマについてのデモンストレーション→SGr に分かれ一人ずつ決められた時間内にテーマについて話す→シェアリング				20 分	
Se10	SGr 毎	人間知恵の輪	テーマ確認・テーマについてのデモンストレーション→SGr に分かれ一人ずつ決められた時間内にテーマについて話す→次回テーマ決め	・全体 Fac ・テーマ確 認とデモン ストレーシ ョン	SGr のファシリテ ーション (SFac)	なし	なし	選択
Se11	SGr 毎	拍手回し	テーマ確認・テーマについてのデモンストレーション→SGr に分かれ一人ずつ決められた時間内にテーマについて話す					
Se12	SGr 毎	たこつばゲーム	フリーテーマであることの確認・デモンストレーション→SGr に分かれて話す					
Se13	SGr 毎	Gr 鬼ごっこ	言葉の花束デモンストレーション→メッセージ書き→言葉の花束を渡す→もらったメッセージを 2 枚無作為に選び、1 人ずつ読んで感想を言う。		言葉の花束デモン ストレーシ ョン・ SGr でのファシリ テーション (SFac)			フリー
Se14	SGr 毎	じゃんけん列車						

2. グループ・プロセス

半構成的 Se は、5つの SGr が同時に行われた。Se5 までは全体のプロセスを記述し、Se6 以降は A「夜はピーナス」(女性 FacCa: 11 名), B「Grateful Days」(男性 FacCa: 11 名), C「NOBORDER 24 の瞳」(女性 FacCa: 11 名), D「Is Me OK?」(女性 FacCa: 12 名), E「クオレ〜かぼちゃのグラタン〜」(女性 FacCa: 12 名) の

SGr ごとに記述し、まとめたものを Table 3, Table 4, Table 5, Table 6 に示す。なお、「」内に示しているのは、Se6 に各 SGr の FacCa と Me で決めた SGr の名前である。

また、本 Gr では最後まで継続的に来なくなった Me はおらず、ドロップアウトとみなされる Me は存在しなかった。

Table 3
グループ・プロセス (Se1〜Se5)

SGr 名	A「夜はピーナス」	B「Grateful Days」	C「NOBORDER 24 の瞳」	D「Is Me OK?」	E「クオレ〜かぼちゃのグラタン〜」
Se1(X/10/4)	オリエンテーション				
経過	Gr について Fac より講義がある。その後、FacCa らも一言ずつ挨拶。				
Se2(X/10/18) 5.72(0.69)	導入				
経過	マンウォッチング→2 人組マッサージ→背中合わせ→イメージフィードバック→キーワード付き自己紹介。ペアを組むのが難しそうな Me もいたものの、マンウォッチングでもほぼ全員が動けており、全体的に積極的な印象。全体を通して友人同士で固まって動く一群も。				
Me の感想	同じ学部の知り合いが多いからか、リラックスできていた。/人との触れ合いが楽しかった。/初回でこんなにリラックスして参加できてよかったと思います。				
FacCa の感想	マッピングで雰囲気良かったです/まだまだ仲間内で動いている。/今後なじめるかな。/ (ベテラン Fac に対して) 時間のマネジメントや各 Ex についてフィードバックをされていて Me も意図が分かって安心できたよう。				
GrSV	積極的に動ける Me のよう。傾聴訓練での Me の様子をしっかりとみておくこと。				
Se3(X/10/25) 5.98(0.84) : 55 名	傾聴訓練①				
経過	WU は FacCa の介入がなくとも Me 同士で質問し合いながら積極的に動いていた。傾聴訓練は簡単なレクチャーの後、FacCa のデモンストレーション→実践。Se3 では簡単な受容+繰り返し。Me は意欲的に取り組んでいるよう。Fac の話への反応も良い。				
Me の感想	デモンストレーションがあったことでスムーズに傾聴訓練に入れた/前回よりは話すのに緊張しなかった/3 分話すのが意外と大変だった。日常の会話では聞き役だが、実際に傾聴をしてみると難しかった。				
FacCa の感想	Me の一人として楽しめた。/傾聴訓練のデモンストレーションで緊張したが、始めるとそうでもなく、話しやすかった。/Fac の話に頷いたりリアクションの良い Me たちだな。				
GrSV					
Se4(X/11/1) 5.87(0.62) : 55 名	傾聴訓練②				
経過	WU は Me 自らよく動いて非常に盛り上がりを見せる。傾聴訓練は Se3 の技法+明確化、支持。ベテラン Fac よりメインは聞き手であり、話の途中に繰り返しや明確化を入れることは話し手が考えをまとめるのに大切なことと話がある。				
Me の感想	「木とリス」で和やかな雰囲気になっていた気がした/繰り返しが少しづつできるようになってきた。/同じ Me の中で 3 つの話題を出すのが大変。/FacCa も様々で楽しい雰囲気そのままだまキャッチして体現化する人もいれば、表現することとまどっている様子の人もいらっしやるよう。				
FacCa の感想	皆難しいながらも傾聴を身につけようと努力していた。/デモンストレーションは、事前にどうするかもう少し話した方が良かったかな。/やっぱりこの Gr の Me は WU で動く Ex をすることが大切そう。				
GrSV					
Se5(X/11/8) 5.93(0.77) : 50 名	傾聴訓練③				
経過	WU はじゃんけんの相手を探して積極的に動き回り、楽しそうな様子。傾聴訓練は Se4+質問と総合練習。これまで同様真剣に取り組む。最後に次回から始まる半構成的 Se の SGr を発表し顔合わせ。各 SGr で簡単に挨拶する。				
Me の感想	来週からが楽しみ。/普段交流のない人と同じ Gr で緊張したが、打ち解けて話すことができた。/ (FacCa について) だんだんとユーモアの感じられる話も増えて全体の気持を上向きにもって下さる感じ。/傾聴が少しできるようになった。				
FacCa の感想	話す人も聞く人も楽しそう。/元気が良い。みんな真剣に傾聴訓練に取り組んでる。/SGr の Me の顔を見られて良かった。				
GrSV					

Table 4
グループ・プロセス (Se6～Se9)

SGr 名	A「夜はピーナス」	B「Grateful Days」	C「NOBORDER 24の瞳」	D「IS Me OK??」	E「クオレへがはちやのグラタン〜」
参加意欲度・期待度	5.83(0.58) / 5.50(0.80)	5.00(1.31) / 4.88(1.25)	5.90(0.57) / 5.80(0.58)	5.73(0.65) / 5.45(0.96)	5.15(1.40) / 4.77(1.48)
Se6(X/11/15) 5.63(0.90)	自己紹介・Grへの期待と不安; 5.95(0.65)	自己紹介・Grへの期待と不安; 6.22(0.67)	自己紹介・Grへの期待と不安; 5.36(0.51)	自己紹介・Grへの期待と不安; 5.09(1.30)	自己紹介・Grへの期待と不安; 5.71(0.79)
経過	Meは11名。現在の所属、家族構成や過去現在の部活やサークルについて語る。人見知りや人と目を合わせるのが苦手なことを語るMeも。	Meは9人。Meは仲良しで固まっている印象。覚悟を決めたように「極度の人見知り」と話すMeも。Facが介入せずとも質問が相打ちになる。シェアリングではサブGr化が起こる。	Meは11名。時計回りで1人3分。共通点が語られることが多い。時間が余りMeからの質問で話を乗り越える。SGr名決めでMe積極的に意見を出し合っで話が盛り上がった。	Meは11名。出身地、家族構成はGrへの期待・不安などが話される。緊張気味で3分間話が持たないMeが多い。シェアリングではFacから動きだし、だんだん活発に。	Meは11名。3分を余らせるMeが多く、FacCaから質問すると、だんだん他Meも質問やFBするように。シェアリングやSGr名決めはFacCaが最初に動けば、あとはMeで動いていく。
Meの感想	「チームのパワーが強いと思った」・「言いたいことをほとんど言えなかった」など。	「とても援助的なGr」「皆が本当に話しやすい雰囲気になれは」など。	「緊張して少しおどおど話してしまった」・「自分の心の底にどんなことが隠れているのか」など。	「少し壁がとれた」・「もっと積極的に話したい」・「全てが不安」など。	「緊張したが、進むにつれてリラックス」・「SGr名決めでもう少し話せば良かった」など。
FacCaの感想	Me同士での会話量も多く、Gr名決めでMe主体で進んでいったが人前で話すことが苦手なMeも。	安全を意識して着地点が分らない。シェアリングでバラバラになり、戸惑う。	Meの話が詰まった時に他Meが質問することで話しているMeの緊張感が和らげて助けられた感じ。	緊張した様子だったが、徐々に緩んできたよう。俯いていったMeが心配。	後半はMeで質問したりということもあったが、FacCaが仕切りすぎた面も。
GrSV	Meがセッションを進める中で、できた体験を積み重ねる。	Grの雰囲気割に得点が高い。	助けにくるMeを探すことが大事。	気になるMe、今後シェアリング時に思いを聞いてみる。	次回、欠席者が来たときの対応を考えておく。
Se7(X/11/29) 5.63(0.87)	私の進路をめぐる過去・現在・未来; 6.23(0.82)	私の進路をめぐる過去・現在・未来; 5.44(1.01)	私の進路をめぐる過去・現在・未来; 5.80(0.63)	私の進路をめぐる過去・現在・未来; 5.09(0.94)	私の進路をめぐる過去・現在・未来; 5.58(0.71)
経過	Meは11名。主に大学を志望した理由や心理学に興味を持った経緯を話すMeが多い。シェアリングで他のMeに話を振るMe。	Meは10人。Facから席替えを提案。ほとんどのMeがすらすらと話す。二人で腕を組んでいるMeも居たが、深い自己開示をするMeの話から腕を離す。シェアリングではMe相互の質問が多数。	Meは11名。ほとんどのMeが3分で現在の進路を選んだきっかけを語るが、話さきり、途中で時間になる。シェアリングで質問モードになった。	Meは11名。大学の選択や、何を日指して今どういうことをしているかという話題。シェアリングでは沈黙が続く目を泳がせ、誰が発言するのか探り合っている様子。	Meは11名。時間の足りないMeが多い。最初に話したMeの流れで幼稚園の頃の夢から話し始める。シェアリングで「続きを」の声に最後に話したMeが語るのに半分以上の時間を使う。
Meの感想	「アクティブリスニング実践中！」・「シェアリングでまだうまく発言できていないので次こそは！」など。	「恥ずかしい」「和やか」「緊張が解けない」など。	「他のメンバーの方の過去と自分の過去に共通点があり、親近感を感じることができた」など。	「妙な間が緊張する」「シェアリングで何も話さなかったのが後悔」「自分のことが少し理解できた」など。	「話し出すと長い。もう少し絞りができれば」「Grに聞く態勢ができて」「など
FacCaの感想	全体的にMeの話を耳を傾けている雰囲気。	Meはしっかり聞いている。シェアリングを動かさしめない。	Meがお互いに真剣に話を聞く姿勢が伝わってきた。	探り合う間が居心地の悪いものだったみたい。待ってみたいより自分が動かなければいい。	特定のMeにスポットライトが当たり、疲れを見せるMeも。どう介入すれば良かったか。
GrSV	話している様子に着目する。	シェアリングでも皆で話せる様に介入してみてもいい。	Meに話したいことを話す。無理しないことを伝える。	Facが自然に介入したり、沈黙を話題にすることで引き出していったらいい。	FacCaの感情を伝える。その場、その時に動く。
Se8(X/12/6) 5.69(0.79)	友人・仲間; 5.85(0.58)	友人・仲間; 5.40(1.07)	友人・仲間; 5.91(0.71)	友人・仲間; 5.40(0.97)	友人・仲間; 5.89(0.33)
経過	Meは10名。中学から今までの友人関係をメインに仲間と友人の違いについてなども話題となった。あるMeの話題が中心になる。	Meは10人。あるMeの話に一同興味するが、シェアリングの時間にその話の「続きが聞きたい」と多数声が上がる。二人のMe以外全員がシェアリングで発言。	Meは11名。自分の友人と仲間に対する考えを語る。Meが頷く。グループのMeは仲間ではないかという発言に皆拍手。	Meは11名。気になっていたMeがこれまでより饒舌。シェアリング時、Facより「話したい時に話せばいい」と初めに言い、笑顔で聞くMe。探りあい・前同よりない。	Meは10名。時間を余らせるMeが多い中話し終わらず、次のMeの時間に食い込むMeも。シェアリングではほぼ全員発言。サブGr化することもあり、FacCaより話を振ると、欠席Meの話題に。
Meの感想	「話すことですっきりした」・「雰囲気がいい」など。	「本音を聞けた」「楽しかった」「緊張が消えない」など。	「用意していた話から、皆の話を受けて、少しそれらを踏まえた方向に軌道修正できた」など。	「話が違われない雰囲気」「沈黙も気にならなかった」「友人の大切さを再認識」など。	「アットホーム」「今、自分が気になっているテーマだったので、話しにくい」など
FacCaの感想	一人のMeが長く話すことになってしまい、きつくなかったか。	全員で参加している感じ。話していない人は少し居づらいつ感じ？	シェアリング時Meへのフォローの仕方は工夫が必要。	前回までの気まずい沈黙がなくなり居やすい。	サブGr化するMeがいるよう。どう介入すれば良かったのか。次回、席替えとかいるかな。
GrSV	無理に話さなくても良いことを全体へのメッセージとして伝える。	盛り上げようとして魅力度が低いMeがいるのでは。	沈黙の話を振って見たら、Facの介入が必要だが、介入しすぎないように。	ゆっくりと進んでいるよう。	サブGr化したら、話題を全体で共有できるように。
#9(X/12/13) 5.89(0.93)	異性・恋愛・結婚; 6.20(0.79)	異性・恋愛・結婚; 5.40(1.14)	異性・恋愛・結婚; 6.00(0.89)	異性・恋愛・結婚; 6.25(0.46)	異性・恋愛・結婚; 5.50(1.09)
経過	Meは10名。主に理想の結婚についての話となる。持ち時間が余ったMeが既知Meから質問を受ける。	集中講義のためかFac含めて6人しかおらず、一同戸惑う。また欠席が多いためシェアリングが38分と長くなったが盛り上がる。「方防衛のために話している様なMeも」。	Meは11名。幸せそうな表情で両親の恋愛・結婚について語る。これから語るMeもいれば、過去のことを語るMeも。	Meは7名。過去～現在の恋愛経験が話される。「このテーマは話しづらい」と言うMeも。全体的に楽しい、笑いの起こる雰囲気。Facへの質問で盛り上がる。	Meは12名。異性との距離の取り方や恋人、失恋話など。シェアリングでは失恋話をしたMeへの気遣いなどもあったが、だんだん結婚→子育てと話題が移っていく。
Meの感想	「フリートークで一言も話さない人がいた」・「まとまった話ができなかった」など。	「奥まで話せた」「よく話していた満足」「うかつなことを話せない」など。	「シェアリングの時に話すのを控えているMeもいるように見えるので、話題をふれたよかったと思う」など。	「楽しい雰囲気」「もやもやを言葉にできた」「すごく刺激的な時間だった」など。	「恋愛は一種のタブー＝不特定と話すテーマではないの？」・「充実した時間」「時間設定なしで話せるかどうか」など
FacCaの感想	テーマに不安を抱えているMeもいたが話しやすいテーマを選んで話せたよう。Meに配慮をよくなるMeがきつくないか。	防衛のために話しているのではない。別のMeの話にイライラして介入。	Meの話題をうまく拾えなかった。たりになかった。	自分の話でこんなに盛り上がるとは。人数もこれくらいがちょうどいい。	今まで一番MeとしてSGrにいたような感じ。しかし、前回欠席MeをはじめMeのアンケートを見ると...
GrSV	Meへの配慮はMeなりの居場所かもしれない。	Facが自己開示することでプレーキはかかる。	Meも安定してきた。無理なフォローはない。	いい雰囲気。次回、休んでいたMeに配慮	今までの一番MeとしてSGrにいたような感じ。しかし、前回欠席MeをはじめMeのアンケートを見ると...

Table 5
グループ・プロセス (Se10~Se12)

SGr 名	A「夜はビーナス」	B「Grateful Days」	C「NOBORDER 24の瞳」	D「IS Me OK??」	E「クオレ〜からびのグラテン〜」
参加意欲度/期待度	5.83(0.58) / 5.50(0.80)	5.00(1.31) / 4.88(1.25)	5.90(0.57) / 5.80(0.58)	5.73(0.65) / 5.45(0.96)	5.15(1.40) / 4.77(1.48)
Se10(X/12/20) 5.60(1.10)	家族: 6.14(0.78)	家族: 5.89(0.78)	家族: 5.70(0.82)	家族: 5.40(0.84)	家族: 4.92(1.70)
経過	Meは11名。Meからの質問で主にきょうだいの話になる。次回のテーマは満場一致で「今年の私を一文字で表すと」に決定。	Meは9人。＜考えてきた事、今思ったこと等自由に。皆で。＞と始める。兄弟や反抗期の話の流れで突然深い自己開示をするMeも。沈黙に耐えられない様なMeも。	Meは10名。あるMeは質問で沈黙を破り、兄弟の話が出る。笑顔で浮かべながら家族の話をするMeもいる。Meのやり取りが増えた。	Meは10名。前半は探り合いの沈黙もあったが、兄弟の話、実家の変化の話などだんだんスムーズになる。あるMeは話さず、終わる際Facより「どうでした?」と尋ねても一言、二言しか答えなかった。	Meは11名。あるMeが質問したことを機にMe間で意見を出し合っていく。話す量に差は大きい。全員が何かしら発言。テーマ選択はMe主導で決定。
Meの感想	「全体的に話がつながるようになってきた」「思っていたよりも話せた」など。	「時間がフリーになって安心」「Grの信頼感を感じた」など。	「いつもより対話的で、深く話せた気がした」など。	「急に縛りがなくなり戸惑った」「色々な話が聞けて良かった」「全然話さない方がでてきた」など。	「自分の番がないと安心」「言いたいことを言わないまま終わった」「家族を思い出して悲しくなった」など。
FacCaの感想	Me同士のやりとりも活発で、Facの介入なしに全員が発言していた。	沈黙の度他のMeに気を使うMe。とりあえず皆話せた。	安心、安全な雰囲気ではいるように感じた。	MeのエンジンがかかるまでFacが引く張って行く感じ。	SGrの様子とアンケート内容に差。Meはどんな思い?テーマの内容で悲しい思いをしたMeも。
GrSV		沈黙があってもMeが動き、和やかな雰囲気なのがこのGr。	構造の緩みによってMeの気持ちも緩んでくる。	話さなかったMeは様子を見ながら。聞いているだけでもいいかも。	テーマ選択はFacCa主導で行なった方がいりかも。
Se11(X/12/27) 5.70(0.86)	今年の私を一文字で表すと: 6.42(0.66)	今年の私を一文字で表すと: 5.44(0.53)	私のX年...: 6.00(0.71)	今年の自分を一文字で表すと: 5.00(0.82)	故郷: 5.67(1.04)
経過	Meは6名。Meの促しでFacCaから発言した後はMe同士で促したり、Meから自発的に話すことで進む。次回のテーマは休んでいるMeの話の聞きたいということで「ふるさと」に決定。	Meは9人。少しの沈黙のち、あるMeが別のMeに「どう?」と質問して始まる。全体的にMeのFBが少なく、ぼつぼつと考えてきたことを話す感じで、会話が続きにくい。	Meは9名。沈黙があり、Meは沈黙を破り、それからそれぞれの「X年は一文字で表すと」と理由を述べるようになる。	Me7名。それぞれ話し終わると、次は誰が話すかという間ができる。最後まで話さないMeがいて、Facから尋ねると二言で終わってしまう。テーマ決め、〈休んでいる人が聞いても驚かないようなものとか〉に「はまってること」	Me8名。FacCaから話し始める。Me同士思わぬ点で繋がる話題も。途中から話題がずれていってしまう。次回のテーマ決めでは「フリーテーマ」の選択肢をなくし、FacCaが率先して意見を言うことも。
Meの感想	「みない人の話に共感して共有できた感じた」など。	「テンガが悪かった」「沈黙が怖くてしゃべりすぎた」など。	「誰かに話をふる人が増えた気がする」など。	「結構たくさん話せた」「少し難しかった」「沈黙が多かった」など。	「く皆さんの声が聞けて良かった」「少し嫌しかった」「一人が話す時間が増えていた気がする」など。
FacCaの感想	少人数だったため、全員で共有できた雰囲気。Meに対してFBや質問をしすぎた。	エンジンをかけたがもっとかけてもよかったか。	助け合うMe関係はよくあった。	よく話すMeが休みでFacが話し少しくなった。話さなかったMeに無理をさせてしまったか。	前半ゆったりした時間だった。けど、テーマからずれることもあったが、すぐ介入できなかった。
GrSV		最初から沈黙を体験させるより、Facが切り出した方がよいのでは。	沈黙の時にFacCaを感じたことを言ってみる。	Facは余裕を持って居られた。話さないMeには強制させないような聞き方を。	テーマからずれるMeに対しては繋ぎとめるように。
Se12(X+1/1/17) 5.66(0.92)	ふるさと: 5.91(0.70)	フリーテーマ: 5.90(0.88)	尊敬する人: 5.78(0.83)	はまっていること: はまりたいこと: 5.60(0.70)	今年の抱負: 5.11(1.36)
経過	Meは11名。序盤は話し出すMeがおらず、FacCaから。故郷という感覚が分からないということや、地元愛、田舎の思い出などが語られる。	Meは10人。何となく話すうちに自然とテーマが怒られることになり、それぞれが怒られた経験や、怒られることについてどう考えるかなどを語る。涙目になりながら話すMeに別のMeからFBも。	Meは9名。Meは積極性を見せ沈黙を破る。多くのMeは自分が尊敬する人の話をし、自分もそのようになりたいと語る。沈黙も挟みながら話を進んだ感じ。	Me10名。それぞれの話していることを聞いての感想や疑問が、MeからMeへ話題が広がっていった。具体的な話から、最後には、はまること自体の話に。最後あまり話さないMeに〈聞いてどう思った?〉と質問。少し考え「皆んな興味をもてる」	Me10名。前回から間が空き、少し探るような雰囲気だんだん和やかに。テーマの特性なのか、全員が順番に発言していく流れに。それでも気になった所を質問するなど相互交流がある感じ。
Meの感想	「ちょっときこなかった」・「あまり発言できなかったがGrに入れた気がする」など。	「自然とテーマが決まった」「無理なく参加できた」「怒られたこと話しくかった」など。	「話さない、話せない人もいて、気になった」など。	「割と自分から話せた」「話を振るのは勘弁して下さい」「会話の広がりがあった」など。	「発言せずとも負い目を感じなくなった」「もっと話を聞いてみたいと思う人がいる」など。
FacCaの感想	久しぶりで序盤は沈黙もあり、介入が多くなったが、Meの動きを待っても良かったかもしれない。	思ったことをそのまま話すとGrが動き出した。	話すモードのMeが欠席されたため、沈黙があった。次のテーマに不安。	Meが主導的で、やりやすさ、過ごしやすさがあった。話さなかったMe、自主性に任せたい。	それぞれ何かしらの体験。けど、Grの様子とアンケート内容に差のあるMeがやっぱり気になる。
GrSV		FacがこのGrで共有したいものを持ちだしても良いのでは。	テーマも盛り上がるようなものじゃなかったの、こんな感じではないんじゃないでしょうか。	話さなかったMeへの聞き方はよいがしんどかったかも。	特定のMeだけでなく、全体を見るように意識を。

Table 6
グループ・プロセス (Se13~Se14)

SGr 名	A「夜はビーナス」	B「Grateful Days」	C「NOBORDER 24の瞳」	D「IS ME OK??」	E「クオレ〜がぼちゅのグラタン〜」
参加意欲度/期待度	5.83(0.58)/5.50(0.80)	5.00(1.31)/4.88(1.25)	5.90(0.57)/5.80(0.58)	5.73(0.63)/5.45(0.96)	5.15(1.40)/4.77(1.48)
Se13(X+1/1/24) 5.89(0.63)	フリーテーマ; 6.10(0.74)	フリーテーマ; 5.80(0.63)	フリーテーマ; 6.20(0.63)	フリーテーマ; 5.18(1.17)	フリーテーマ; 5.95(0.57)
経過	Me は 10 名。なかなか Me から話し出す様子が見られなかったが、Me から FacCa への質問をきっかけにインフルエンザや気候、学校行事、食べ物などの話題に。	Me は 10 人。部活の話、今年の抱負、お勤めの店、など話題が転々とする。＜名残惜しい＞に Me が Gr の感想を述べ、しんみりとした雰囲気で終わる。	Me は 10 名。Me 互いのやりとりが盛んで行った。共通の話題で Me、同士はそれぞれの考えを共有。場の雰囲気何度もしらばりかっていた。	Me は 11 名。話題は出るも、全員共通の話題がなかなか出なかった前半。ある Me の「暗い話やめしよう」の呼びかけから方向転換し、全員話せる話題に。地元のお勧めを話していった。	Me は 11 名。学部の話など全員で共有できない話だったため FacCa が介入することもあったが、後半は地元や旅行先の話など全員で話している感じに。沈黙もあり、FacCa も EG 自身の体験について話す。
Me の感想	「居やすかった」・「自分から話せるようになった」など。	「何を話していいかわからず緊張」「名残惜しい」「楽しかった」など。	「仲良しな友達のような雰囲気。年齢差はあるけど、同年代のような」など。	「皆の話を色々聞けた」「フリーテーマ難しかった」など。	「はじめからフリーテーマだったらこのような円滑な進行にはならなかった」「会話がなければ、それも一つの形というセリフが印象に残った」など。
FacCa の感想	話題は転々としたが、一方で Me 同士の相互作用は活発だったように思われる	話が移り変わり、深まらないが暖かい。	自然な雰囲気の中で Me が流れに沿って出てくれた話題で深く行っていないが安全性を保たれたと考える。	思っていたより聞いていた Me が多いことに気付いた。	はじめは数名の Me が動かせてくれて最後には皆で話せていた感じ。Me としても Gr を楽しめた。
GrSV		最後なので Me が軟着地を選んだのでは。	FacCa の役割として Me が落ちこぼれないようにすることが重要。	全体で話すよう呼びかけただけではなく、テーマを出した方が Me は困らない。	FacCa の EG についての自己開示の影響が大きい。
Se14(X+1/1/31) 6.48(0.68)	言葉の花束; 6.89(0.42)	言葉の花束; 6.56(0.73)	言葉の花束; 6.80(0.42)	言葉の花束; 6.09(0.70)	言葉の花束; 6.14(0.71)
経過	Me は 11 名。送り主の名前を読むか否かで戸惑いも生まれたが、最終的には自由な雰囲気。カードを読む際にも笑ったり照れたりしながら読み、感想ではもらったコメントに対する嬉しさが語られる。終了後はメアドを交換し合う Me の姿も。	Me は 9 人。戸惑いながらも Me 全員時間内、少しオーバーする程度で書き上げる。カードを渡す時は一人一人目を見て渡すなどいい雰囲気。読みながら照れたり笑ったり。	Me は 10 名。紙を選ぶ時から真剣。また書いた紙の数を数える Me もいる。運命のカードを抽選する時に次の人に任せて選んでもらう。読み合う時に思わず笑ってしまう感じ。	Me11 名。だんだん集中して書いていた。読み上げるときは、照れくさいような嬉しそうな表情。周りから見られていた自分の姿に驚きながら、話を聞いてもらったこと、話をしてくれたことへの感謝の気持ちを述べた人が多かった。	Me11 名。書きながら会話が、欠席 Me へ書きたいという声も。読み上げる時は照れくさくも嬉しそう。時間内に書ききれない Me がいた。授業終了後も残れる Me は残って会話をしていた。
Me の感想	「なごやか」「書くのは恥ずかしかったが読むのは嬉しかった」など。	「楽しく終えられた」「一つに「寂しい」など。	「メッセージ紹介の時笑いが絶えず、とても楽しい雰囲気だった」など。	「暖かい雰囲気」「カードが本当に嬉しかった」	「照れくさくも嬉しい」「Gr の雰囲気が FacCa に似ていた気がする」「暖かい Gr だった」など。
FacCa の感想	あたたかな雰囲気の中進んだ。送り主の扱いについては迷ったが、最終的には自由な流れになれたので安心した。	皆で手をつないでジャンプ台でジャンプしたような感じ。カードは素直に嬉しい。	温かい雰囲気が終われてよかった Me の観察の繊細さに驚いた。	終わってホッとしたのと、色々な事を語り合えた Me と別れるのが惜しい気分。	最後まで軒糸曲折色々あった Gr。けど、暖かい雰囲気に進んだのかな。宝物をもらった気分も。
GrSV			この Me だからこそ、この SGr 名とこの経過だったので。	Me に恵まれたよう。配慮に配慮で返されていた。真面目なファシリテーションだったのかも。	言葉の花束で書けない Me がいた時、FacCa が何を狙いにしていたかで対応は決まる。

3. 参加後の気持ち

全 Se 終了後の Me の満足度平均は 6.48 ($SD=0.68$) であった。SGr ごとには A: 6.55 ($SD=0.52$), B: 6.56 ($SD=0.73$), C: 6.67 ($SD=0.50$), D: 6.20 ($SD=0.92$), E: 6.14 ($SD=0.71$)。自由記述では「今まで他人でしかなかった方々が Gr を通して身近な存在になりつつあることに嬉しさを感じます」というように Gr の Me との距離感が近まったり、仲良くなったりしたことについて語るものが多かった。また、「初回のように話す順番を指定されるよりは、後半のようにランダム（話したい人が話す）形の方が良いと感じました」、「段階もあったので、Gr での Se を毎回楽しめた」という構造に関するものや「どう話そうか、タイミングを悩んだりしたこともありました、回を重ね話しているうちに自然な流れといつか雰囲気が出てきて、沈黙も受け入れる余裕ができたなあと思います」という自身への気づきについての記述もあった。

IV 考 察

1. FacCa の体験から見た本方式における Fac 養成について

(1) 多様なファシリテーションの体験

本方式により、FacCa らは構成的 Se、半構成的 Se、非構成的 Se と 3 つの構造の EG におけるファシリテーションに近い体験をすることができた。よって、それぞれについて本方式、または本 Gr の FacCa や Me の特徴を踏まえて考察する。

①ベテラン Fac による構成的 Se (Se1~Se5, Se14) において、FacCa は Se1 より Se の最後に Me の前で感想などを語るというところを行い、Se3 より WU の Ex を担当したり、傾聴訓練のデモンストレーションに参加したりと徐々に Fac 役割を担うことが増えていった。このことは Gr に Me として参加したり、外から観察したりする中で Gr の様子を把握することにつながった。さら

に、Meの積極的な様子や体を動かすExが大切そうだということなどMeについて見立てた上で、Se3以降のWUのExを考えることにもつながっていった。また、最初はベテランFacのファシリテーションについての観察学習やFacCa自身Meとして体験学習を行い、慣れてきたところでWUの担当やデモンストレーションへの参加と徐々に役割が増えたため、FacCaもゆとりを持ってGrに挑むことができた。そのため、Se4、5でMeの感想(Table 3)にあるように「とまどっている様子」を見せたFacCaもいたのが、「だんだんとユーモアの感じられる話も増えて全体の気持を上向きにもって」いくというように、Meから見てもFacCaの様子に変化が生じている。このようにベテランFacによる構成的SeにおいてFacCaは観察やMe体験による学習とともに本Grの特徴を見立てていくことができたことで、安心感やゆとりを持って徐々にFac役割を担う意識を持つことができていったのではないだろうか。

②次にSe6からSe12までの半構成的SeにおけるFacCaの体験であるが、本方式は段階的に時間設定、テーマについてMeの自発性に任せる構造をとり、非構成方式に近付けていった。森園・野島(2006)は半構成方式の特徴の一つに「一つのセッションで全員が発言する機会を与える」ことを挙げているが、本方式ではこれを途中から構造として設けていない。時間設定がなくなったSe10でFacCaはMe全員の発言を気にかけて(Se10:A, B, D, E)、全員が発言することによる安全感を強く意識していた。このように、構造として設けないことでFacCaはかえって「全員が発言する機会」をどのように保障するのかを考えることにつながっていた。野島(2000)はGrの導入段階において「全員がある程度以上は、どのような内容であれとにかく発言する機会」を持つことの意義を唱えている。Fac養成という点から考えると、時間設定がなくなった最初のSeでこのことを意識できたことは、意義のあることであったように思う。一方で、「話を振るのをやめてください(Se12:D)」と話すことに抵抗感を覚えているMeも見受けられ、「全員が発言する機会」を形だけ守ることが必ずしも良いとはいえないことが考えられる。このように個々のMeに対してはGrSVでも言われていたように「強制させないような聞き方(Se11:D)」を考えるなど、どのように関わっていくのか、それぞれのMeがどのようにGrにいるのが良さそうかといった「個人の状態を理解しようとする視点」(野島, 2000)を考えていくことが必要であり、本GrでのFacCa体験はそのような視点でGrについて考えることにもつながっていたと言える。

また、時間設定のないSeを繰り返すことでMeから自発的に話し始めるGrなのか、Me同士でどのように質問をしたり、フィードバックをしたりするのか、

FacCaの介入はどういったところにあった方がいいのかといったSGrの動きについてFacCaは見立てることができ、それに合ったファシリテーションを試行錯誤していくことができた。結果的にこのようにSGrの動きについて見立てられていたことが、テーマが決まっていなかった非構成的Seでも、安心感を持ってファシリテーションすることにつながったと考えられる。

③最後に非構成的Se(Se13)についてである。野島・高橋ら(2010)は、構造によってFacCaの体験もそれぞれ異なるとし、特に非構成的Seについては構成的Seと半構成的SeによってMeの親密性が構成されてから行われたため、いきなりUEGのファシリテーションを体験するよりも安心感を持って非構成的Seに挑めることにつながったとしている。本方式においてもSe13の非構成的SeにおいてFacCaらが「安全性が保たれた(Se13:C)」、「MeとしてもGrを楽しめた(Se13:E)」とGrでの安心感や、自身もGrの中で楽しさを感じることについて述べており、FacCaとして非構成的Seに安心して取り組むことができた。また、この点については本方式の半構成的Seにおいて段階的に非構成方式へ近づく構造をとっていたことで、FacCaは時間設定のない中でのMeの動きや沈黙に対する意識についてある程度把握した上でGrに臨めたことが大きい。野島・高橋ら(2010)はGr経験の多さの違いから非構成的SeにおいてFacCaとMeとの間に沈黙などに対する意識の違いがあり、それに戸惑ったということが言及されていたが、本方式では以上のような点より、それが緩和されたのではないだろうか。

(2) 各FacCaの特徴の見えやすさ

本方式は、Se6からSe12の半構成的Seの中で構造を段階的に非構成方式に近付けていったが、そのように構造が緩くなることでGrのファシリテーションについて各FacCaに任される部分が大きくなった。そのため、Seが進むにつれて、各SGr、各FacCaの特徴が見えやすくなったが、テーマ選択法によって選ばれたテーマには特にそのことが表れていた。野島・大庭ら(2011)はテーマ選択法によるテーマで各SGrのプロセスを見立てることができたと報告しているが、本Grにおける5つのSGrには、Me自らフリーテーマを選べる程に成熟度が増していったと考えられるSGr(Se11:B)や、次Seまで間が空くことや、年末であり欠席のMeが多かったことを考慮してMe自ら話しやすいテーマが良いと「はまっていること・はまりたいこと」を選ぶSGr(Se11:D)もあった。それらのSGrではMeが主体的にテーマを選び、FacCaもMeの選択がSGrの状態に合ったものであると認識した上でSGrを進めることができていた。

一方、FacCaの判断によってテーマの選択肢の内容を

変えたり、FacCaが積極的に意見を言ったりしてテーマを決めるSGrもあった(Se11:E)。それは、SGrに成熟度に合ったテーマをというFacCaの思いとともに、安部(2010)が指摘するようにGrを掌握できない不安の強さが表れていたとも考えられる。複数のSGrがあることは、このようなFacCaそれぞれのファシリテーションについて比較する機会となるが、その中でもテーマ選択の方法やその内容については、FacCaの動きの様子を見てとることができ、それらを振り返り、自身のファシリテーションについて気付きを得るのに大きな役割を果たすものであったと考えられる。

また、そのような特徴が明確になる場としてGrSVの存在も大きなものであった。各SGrのファシリテーションを行う中でFacCaらは「もっとエンジンをかけた方が(Se11:B)」,「テーマからずれる(Se11:E)」ことへの介入についてなど、その場その時での判断に迷いを持つことがあった。しかし、毎SeについてGrSVを受けることで、検討やアドバイスを受けたり、他のSGrの進む様子について報告を聞いたりすることを通して、SGrの様子や自身のファシリテーションについて振り返ることができた。安部(1982)はFac養成の一つに体験したことを認知的に消化するものとしてGr臨床カンファレンスを挙げており、これがGr体験の持つ意味をより明確なものにするものであると示唆しているが、FacCaが受けたGrSVも同様に、認知的にGr体験を消化することに一役買っていたと考えられる。

さらに、野島・西ら(2003)はSEGのFac養成においてそれぞれの違いや特徴について“個性の再認識”が行われ、他のFac見習いとの比較から「自分らしいファシリテーション」について考え、自信が育まれたとしている。本方式においてもGrのFacCaとしてそれぞれがWUを担当したり、GrSVの中で自身のSGrについて話し、また他FacCaのSGrの報告を聞いたりする中で、例えば、自身がどの程度Grの流れに介入しているのかということ意識し、もう少し介入してもよさそうかどうかということや逆にもう少しMeに任せてみてもいいかもしれないなどと考えていた。このように、Facとして成長するには、まずは自分のファシリテーションの特徴を知ることが必要であり、それがあって初めて次のことを考えることができ、そのことがFacとしての成長にも結びついていったのではないだろうか。

(3) 今後の課題

本Grは学部生対象の授業という形で実施された。そのため、受講者でもあるMeの体験が構造により大きく異なるものにならないようにする必要があり、SGrに分かれた後の構造の変化は一律に行うようにした。しかし、時間設定のなくなるSe10で魅力度が大きく下がるSGr

もあり、その段階での構造の変化がそのSGrには適切でなかった可能性が考えられる。また、時間の構造が変わるSe10のテーマは「家族」であったが、このテーマは野島・桂木ら(2007)により語りやすいものから普段の生活ではなかなか自己開示しないテーマへ移行させていったというテーマ設定の中で後半に設定されていたものであった。そのため、構造が変わりGrが揺らぐ時に深いテーマの設定を行ったことが、魅力度の大きな低下につながったことも考えられる。安全感・安心感ということを意識したときに、そのGrが現段階で時間設定無を導入できるのか、また導入する際に丁度良いテーマの深さはどの程度かということをしかり見立てることが、本方式においては必要だと考えられる。

2. メンバーにとってのグループ体験について

(1) Me 同士の相互作用

本方式において、Meの参加後の気持ちには他のMeを「身近な存在」と感じるというように、Me同士の距離が近づいたことや、そのことについて嬉しいといった気持ちが語られることが多かった。また、Me同士でメールアドレスを交換している姿や(Se14:A)、授業が終了した後もMeが残って会話している姿(Se14:E)などが見られ、Me間でEGの目的の一つである「深くて親密な関係」の形成がなされているようであった。安部(2010)は「グループ体験は、友達づくりの場である」とも述べているが、本Grはそのような役割も果たしたと考えられる。また、本方式はねらいの一つに「Me同士の相互作用が生まれやすく、つながっている感じが持てる」を挙げており、そのためにWUでは出会った人とじゃんけんなどを通して交流するようなExや他者と実際に触れ合うようなEx、SGrの中で協力するようなExを行ってきた。WUには集団場面での安心感の獲得や心身の緊張をほぐし、自由な自己表現を可能にするために行われる(本間・茨木, 2008)が、Se2やSe3のMeの感想にあるEx後の雰囲気の良い言及からも本GrにおいてWUがうまく機能していたことがうかがえ、それが次の活動に移って他Meと関わるのに必要であったと考えられる。

半構成方式における時間設定は各Meが話す機会の保障をしている一方、その時々で質問をしたり、フィードバックをしたりすることを難しくする一面があった。Se3からSe5の傾聴訓練ではベテランFacより「話し手が思うままに話すのではなく、程良いところで切って繰り返したり明確化を行うことは相手が自身について気付きを得たり、まとめたりするのにつながる」という話があり、傾聴訓練の中で実践されていた。しかし、SGrの半構成的Seでは、時間を余らせたMeに対しては他MeやFacCaから質問をするといったMe同士の関わりを持

てていた (Se6: B, C, E) が, Se7 のように時間が余らない時は一人一人が話して終わりとなってしまう, 時間設定がある中でその話に対して質問やフィードバックを行なうような Me 同士の相互交流をすることは難しくなると考えられる。そのような中で時間設定をなくすことは, 他 Me の話に対してその時に反応でき, “今, ここで” の感覚を持って Gr を進めることを可能にした。その結果, Me の相互交流が生まれ, より他の Me を身近に感じる「出会い」へつながったのではないだろうか。

(2) 一人当たりの時間設定がなくなることについて
時間設定について, 森園・野島 (2006) は Se の中で全員に発言の機会が与えられる一方, 「しなくてはいけない状況」となることを示している。本方式では Se10 より時間設定のない Se を行っているが, 「時間がフリーになって安心 (Se10: B)」, 「自分の番がないと安心 (Se10: E)」など「しなくてはいけない状況」でなくなったことで SGr に居やすくなったとする Me がいた一方で, 「急に縛りがなくなり戸惑った (Se10: D)」, 「言いたいことを言わないまま終わった (Se10: E)」と時間設定がなくなったことでの戸惑いについてもアンケートに記述された。しかし, Se が進むと「結構たくさん話せた (Se11: D)」, 「割と自分から話せた (Se12: D)」と話せたことについての記述がある一方で, 「あまり発言できなかったが Gr にいた感じがする (Se12: A)」, 「発言せずとも負い目を感じなくなった (Se12: E)」というように話さなくとも居られる感じを Me が感じるようになった様子がうかがわれる。また, 参加後の気持ちでは「どう話そうか, タイミングを悩んだりしたこともありました, 回を重ね話しているうちに自然な流れというか雰囲気が出てきて, 沈黙も受け入れる余裕ができたなあと思います」というように, Gr の中で自分の状態について意識し, その変化について気づきを述べるものも見られた。村山 (2008) は構成・非構成にとらわれず両者の統合, ないしは活用する方法として PCA グループを提唱しているが, その中で大切にしている視点に「所属感の尊重: その人なりの『繋がり方』『参加の仕方』を大切にすることや『ありのままにられる自分の強調』ということを挙げている。本 Gr は話さねばならない構造から必ずしもそうではない構造に変化した。そのために Me が戸惑いを感じるがあった一方で, より自分自身の居やすい形で Gr にいる方法を模索することができたのではないだろうか。これまでのコラボレーション方式では, Me のドロップアウトが課題として残されてきた (野島・山崎ら, 2009 など) が, 本 Gr では継続的に来なくなる Me はほとんどおらず, ドロップアウトと考えられる Me は存在しなかった。これは, 話したくない時やテーマでは話さずに聞くという形で Gr に

いられるということが安心感につながったためではないだろうか。

謝 辞

本論文を作成するにあたり有益なコメントをいただきました九州大学大学院人間環境学府の山口雄介さんに感謝いたします。

引用文献

- 安部恒久 (1982): エンカウンター・グループにおけるファシリテーターに関する研究 中村学園研究紀要, 15, 1-15.
- 安部恒久 (2010): グループアプローチ入門 誠信書房.
- 本間美智子・茨木博子 (2008): 集団心理療法におけるウォーミングアップの体験内容とその治療的意味について—ウォーミングアップ体験尺度から— 心理劇, 13, 29-43.
- 星野 希・野島一彦 (2008): 「半構成方式」によるエンカウンター・グループのファシリテーター養成に関する考察—ファシリテーター・キャンディデートの視点から— 九州大学心理学研究, 9, 153-161.
- 桂木 彩 (2007): 看護専門学校生を対象とした「セッション・テーマ設定エンカウンター・グループ」におけるコ・ファシリテーター体験の考察 九州大学心理臨床研究, 26, 153-160.
- 森園絵里奈・野島一彦 (2006): 「半構成方式」による研修型エンカウンター・グループの試み 心理臨床学研究, 24(3), 257-268.
- 村山正治 (2008): PCA グループの試みと実践を中心に 人間性心理学研究, 26, 9-16.
- 野島一彦 (1985): グループファシリテーターの養成をめぐる 九州大学心理臨床研究, 6(2), 40-49.
- 野島一彦 (2000): エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版.
- 野島一彦・伊勢谷凡子・森園絵里菜 (2006): 「複数コ・ファシリテーター方式 V」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, 7, 1-8.
- 野島一彦・金子周平・金 鉉喜・曾 小瑩 (2004): 「複数コ・ファシリテーター方式 III」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, 5, 1-7.
- 野島一彦・桂木 彩・篠原光代・二ノ宮英義・原田絵美子・吉田真美・李 曉霞 (2007): 「コラボレーション方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み—<テーマ設定法>を中心に— 九州大学心理学研究, 8, 175-183.

- 野島一彦・廣 梅芳・鄭 艶花・村上博志・安田 郁 (2005)：「複数コ・ファシリテーター方式Ⅳ」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, 6, 1-7.
- 野島一彦・江 志遠・星野 希・松本 文・三塩新人・宮本純子・カサリナ シン イェ リ (2008)：「コラボレーション方式Ⅱ」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み—＜テーマ設定法＞を中心に— 九州大学心理学研究, 9, 163-170.
- 野島一彦・西見奈子・藤松裕子・山田淳子 (2003)：「複数コ・ファシリテーター方式Ⅱ」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, 4, 1-7.
- 野島一彦・大庭三奈・橋詰郁恵・平田陽子・山口雄介 (2011)：「コラボレーション方式Ⅴ」による構成的エンカウンター・グループの試み—＜テーマ選択法＞によるファシリテーター養成法の検討— 九州大学心理学研究, 12, 169-178.
- 野島一彦・高橋大樹・韓 海錦・小畑智敬・杉久保英司・田中 純・山口祐子 (2010)：「コラボレーション方式Ⅳ」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み—テーマ設定の留意点と非構成的セッションの導入を中心に— 九州大学心理学研究, 11, 235-243.
- 野島一彦・内田和夫 (2001)：「コ・ファシリテーター方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, 2, 43-51.
- 野島一彦・山崎俊輔・濱田恵子・顧 佩靈・森本文子・佐々木健太 (2009)：「コラボレーション方式Ⅲ」による構成的エンカウンター・グループの試み—傾聴訓練・意図的マッチング・テーマの事前調査の導入を中心に— 九州大学心理学研究, 10, 239-248.
- 野島一彦・吉岡久美子・高橋紀子・三谷佳子 (2002)：「複数コ・ファシリテーター方式」による構成的エンカウンター・グループのファシリテーター養成の試み 九州大学心理学研究, 3, 21-28.
- 内田和夫・野島一彦 (2003)：ベーシック・エンカウンター・グループのファシリテーター養成における「コ・ファシリテーター方式」の意義—「ちがいが」に注目して— 九州大学心理学研究, 4, 75-81.